

## 皆で参加し、調べ、守っていくタンチョウ

理事長 百瀬邦和

タンチョウ保護研究グループ（RCC）の標識調査の参加者が、今年でのべ3000人を超えました。この調査は、生後2ヶ月ほどのまだ飛べないタンチョウのヒナを捕まえ、標識（足環）を付ける作業から始まります。調査は全て人海戦で、タンチョウの家族を周りから取り囲んで捕まえるため、大勢の調査員が必要になります。しかも、過酷な作業です。タンチョウの家族がいる湿原内に入り、水路や川を横断するには、胴付き長靴（胴長）が必要です。また、蚊やブヨの待ち構える藪の中に分け入るので雨具と手袋を着用します。涼しい北海道とはいえ調査期間は夏ですから、この服装での活動では、蒸し暑さなど身体的な負担も相当なものです。そんな苦勞をものともせず「タンチョウを守ることにつながる活動だから」と多くの方がRCCの調査活動に、ボランティアで参加していただきます。RCCが長年標識調査を続けてこられたのは、参加協力して下さった皆様のおかげです。この場をかりて御礼申し上げます。本当にありがとうございます。そしてこれからも、どうぞよろしく願いいたします。沢山の方々ボランティアで参加していただき調査が成り立っているのは、冬の総数カウント調査も同様です。こちらの調査も暑さが寒さに変わるだけ、衣類等の装備や身体的・精神的な負担は標識調査と変わりません。こうしたボランティア調査員の存在こそが、RCCのかけがえのない財産です。

日本で、タンチョウほど総数や寿命についての直接的な記録が長期にわたって得られている鳥はいません。タンチョウをはじめとした希少種保護の担い手が、中央から地元へ、官から民へと動こうとしている中で、草の根パワーに支えられているRCCの活動は、これから目指すべき自然保護活動のあり方として誇りにできるものであると思っています。

今号の表紙写真は、やはり協力調査員から、意外なところでタンチョウの家族を見かけたので、と送っていただきました。当地は新しく確認された繁殖つがいの記録であり、今年ヒナに標識をつけることができました。

巻頭言	・・・1
RCC2019年活動報告	・・・2
BirdLife International の 카테고리引き下げ案	・・・5
日本のラムサールに住んで	・・・6
<連載> 鳥と自然と人 ⑦	・・・7
<活動記録>	・・・8

# タンチョウ保護研究グループ2019年度活動報告

## ★ 調査研究活動

### ・タンチョウ生息状況調査

#### ＜繁殖状況調査＞

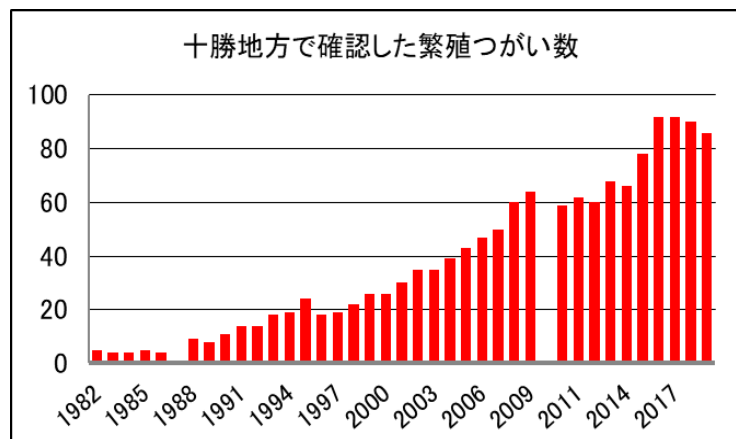
繁殖期の飛行調査を4月20日と21日に十勝地方で行いました。調査範囲は広尾町東部の河川から十勝川までの沿岸湖沼群と十勝川流域です。飛行調査前後の地上調査等の情報を含めると、十勝地方で確認した繁殖つがい数は前年をやや下回る86となりました。

#### ＜総数調査＞

事前にカウント調査勉強会と班長会議を行った後、2019年1月24日から2月4日まで10日間のカウント調査を行いました。日程順に、音別・白糠、阿寒（2日間）、十勝東部、十勝西南部、標茶・弟子屈、鶴居（2日間）、浜中・根室、中茶安別で終日調査を行い、日高、オホーツク等その他の地域は個別に情報を収集しました。調査に参加してくださった方は計57名、のべ146人にのびります。集計の結果は、例年通り50羽単位でまとめた概数で1,800羽となり、調査の参加者ほかに向けたTKGニュースNo. 66で発表しました。

### ・タンチョウ標識調査

事前勉強会と、十勝、釧路、根室地方で予備調査を行なったのち、捕獲・放鳥作業を2019年6月22日より7月21日まで、計13日間行いました。調査には51名、のべ147人の方が参加者してくださり、25羽のヒナを標識放鳥することができました。今年はさらに環境省の保護収容事業に協力して、保護放鳥した5羽にも足環の装着を行いました。調査の結果は、調査の参加者等に向けたTKGニュースNo. 67を9月に発行し、報告しました。標識個体の確認情報の収集



は随時行ない、2020年5月20日現在で162羽の生存とその状況を確認しています。ヒナを捕獲した際に採取した血液、糞等の資料は、本法人のメンバーである酪農学園大学寺岡教授、釧路市動物園の獣医師に提供し、性別の判定、DNAの検査、鳥マラリア及び寄生虫の感染状況の研究を行っています。

### ・DNAを使った餌の調査

酪農学園大学寺岡研究室との共同研究で、タンチョウの餌生物の同定を行うことを目的として、標識調査の際にヒナから採取した糞中に含まれる餌生物のDNAを分析しています。帯広畜産大学赤坂研究室で行った安定同位体を指標とした、タンチョウが摂取した餌資料の分析にも協力しました。

## ★ 保護・保全活動

#### ＜タンチョウの生息地分散＞

2019年4月に釧路を訪問された、タンチョウ復帰を考える会（宮城県丸森町）の梅津会長ほか、にタンチョウの生息地と生息状況を紹介しました。

越冬個体が釧路地方に集中しているタンチョウを分散させることを目的として実施している、三大給餌場での給餌量削減の影響評価について、環境省からの委託を受け、過去のデータを分析しました。

タンチョウの分散を目的とした、環境省のタンチョウ越冬敵地解析等ワーキング

グループに参加しました。

#### ＜傷病個体の保護収容への協力等＞

各地で目撃された傷病タンチョウに関する問い合わせに対応しました。また、環境省による中標津俵橋地区での傷病タンチョウの保護収容活動に協力しました。

#### ・中標津俵橋湿原プロジェクト

本年度も中標津町より借用している俵橋湿原内の町有地でトウモロコシを耕作し、このトウモロコシを使って、同地と、約4km離れた俵橋高台の中司農場の畑脇に計2つのニオ型給餌台を設置しました。今回も根釧農業試験場から約100kgのデントコーンの提供を受けました。初冬には俵橋湿原のニオで1家族、中司農場のニオ周辺では多数の足跡が確認されましたが正確な越冬羽数は確認出来ていません。

9月27日、俵橋湿原の一角に残されている未開発の湿地で、希少樹種の「ヤチカンバ」を見つけるための調査を会員有志によって行いましたが、発見できませんでした。

会員で同プロジェクトのメンバーである大河原氏が春と秋にかすみ網よる鳥類標識調査を行い、アオジ、ノゴマを中心に17種、993羽に標識・放鳥しました。さらに、当地で標識されたアオジ1羽が2020年春に釧路市街で回収されました。

#### ・キナシベツ湿原プロジェクト

キナシベツ湿原で活動している大学生グループのフィールドアシスタントの活動に協力するとともに、タンチョウについてレクチャーを行いました。地元の榊原氏の協力で、当地で育ったヒナに初めて足環を装着し、行動圏が追跡できるようになりました。8月に行った第6回国際エコキャンプの拠点として当地を活用し、独特な自然を学習しました。

#### ★ 教育普及活動

##### ・タンチョウその他ツル類に関する講演・講習会

2019年4月13日、大阪市のNPO法人シニア

自然大学の開講式で、顧問の山根さんがタンチョウの生態と当法人の活動について講演しました。

2020年2月11日、タンチョウ・シマフクロウ・ワシ類の分散と生息環境整備に対する地元の理解を進めることを目的とした環境省主催の市民フォーラムin中標津で講演しました。

#### ・会報の発行・ホームページ制作等

会誌「Tancho」第37号を2019年7月、第38号を2019年11月、第39号を2020年3月に発行しました。また、2019年6月にTKGニュース66号、9月に67号を発行し標識調査および冬期カウント調査の参加者ほかに送付しました。

ホームページのWhat's New! コーナーの記事を年度内に19回更新しました。また、その他に主な活動の中の情報の一部を更新しました。

#### ・出版物発行等

10月より釧路市内の「マルシェ山花」にタンチョウの現状とRCCの活動を紹介するポスター掲示を開始しました。

タンチョウの概況についての広報を兼ねた入会のしおりを作成し、配布を開始しました。



#### ★ 国際協力活動

##### ・国際タンチョウネットワークの活動への参加・協力

イオン環境基金からの助成をいただき、8月20日～27日の7日間の日程で中国と国内の大学生4名が参加した第6回国際エコキャンプを行いました。今回は夏に初めて行ったため、タンチョウの繁殖状況の調査・研修が中心で、さらに環境省、釧路国際ウェットランド

センター、釧路市動物園の担当者ほかの協力によるレクチャーも行いました。



### ・世界のツル関係者との交流及び情報交換

4月28日から6月8日、アメリカのトーマス・ワトソン財団フェローシップを得て、タンチョウ保護活動の勉強のために来日したC. J. ブレア Jr. 氏がRCCに滞在しました。滞在中、同氏はタンチョウの生息状況の視察、保護活動の状況と研究者、保護活動家、地元市民への取材、高校生との交流などを行いました。

6月27日から7月2日まで、タイからオオヅル野生復帰プログラムのメンバー4名が来釧し、当法人の標識調査を研修しました。

10月20-23日、中国・北京市 北京林業大学で開かれた「東アジアにおけるツル保護のための国際ワークショップ」に出席、講演しました。

### ★ その他の活動

#### ・提言等

池田河川事務所の行う十勝川の築堤及び高水敷工事に際して、タンチョウの生息に悪影響を与えないよう、工事の時期、注意事項についてコメントしました。

釧路河川事務所の行う釧路川築堤工事に際して、タンチョウの生息に悪影響を与えないよう、工事の時期、注意事項についてコメントしました。

北海道根室振興局農地課、同釧路総合振興局農地課が事業を予定している草地改良事業、農道改修工事等についてタンチョウの生息に悪影響を与えないよう、工事の時期、注意事項についてコメントしました。

釧路湿原自然再生協議会の5つの小委員会に参加しました。

環境省のタンチョウ保護増殖検討会に参加しました。

### ・情報発信事業

IUCN SSCのツル類専門家部会による”Crane Conservation Strategy”が発刊されました。RCCは本書の一部を担当しています。

10月13日に韓国・京郷新聞社からのRCCの活動についての取材を受けました。

11月18日にオーストラリアのジャーナリストJulian Littler氏よりRCCの活動に関する取材を受けました。

### ・この法人の目的を達成するための事業 (本会の活動を支える為の資金調達活動など)

10月27日に第37回 前田一步園賞を受賞しました。



10月29日に国際ソロプチミスト釧路アミティから2019年度活動資金援助部門クラブ賞を受賞しました。

11月19日に国際ソロプチミスト釧路から2019年度社会ボランティア賞部門クラブ賞を受賞しました。

# BirdLife Internationalからの タンチョウのカテゴリー引き下げ案について

百瀬邦和

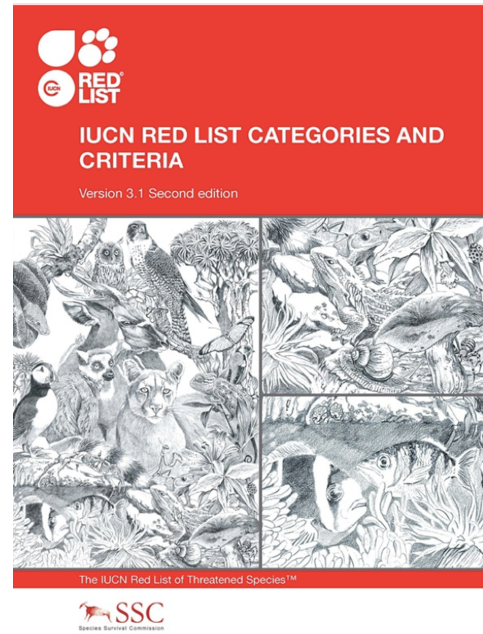
今年6月、IUCN Red List鳥類部門の作成を担当しているBirdlife Internationalより国際自然保護連合(IUCN)のRed Listにおけるタンチョウの位置付けを変更する提案(危機Endangered から危急Vulnerableに1ランク下げる)が出されました。タンチョウ保護研究グループ(RCC)は、法人としてこれに反対の意思表示をすることにしました。

そして、Birdlife Internationalへ、変更案への反対意見を送ってくださるようHPやメールなどをお願いをしたところ、タンチョウの現状を知っている国内の会員やボランティアの方々、一緒に活動している各種団体、行政、さらに国際タンチョウネットワーク(IRCN)からは中国、韓国、ロシアの関係者など、多くの方々が162件にのぼるコメントを送っていただきました。その結果、今回はタンチョウのカテゴリー引き下げ案は保留とされ、変更は一時的に見送られることとなりました。

Red Listとは、世界の絶滅のおそれがある生物が、名前と絶滅危機ランク順に並べられ、その危機要因、分布、生態情報などが記載されたリストです。その目的は、情報を提供することで、世界各地での生物多様性保全活動を進めることにあります。このリストを基準に、世界の国々が独自のRed Listを作成しており、日本も環境省Red Data Bookの編纂の際に参考にしています。

本来、Red Listのカテゴリーが下がることは、鳥の保護に関わっている全員の目標ですし、喜びでもあります。しかし、今回、タンチョウのカテゴリー引き下げに、私たちが反対の意思表示をしたのは、タンチョウを現場で追いかけている者の目からは、危機的状況を脱したとはいえないという率直な判断からです。

カテゴリーの位置付けに使われている現在の判断基準は、個体数の増減、分布範囲、成熟個体の絶対数と増減、絶滅の確率などとされ、これらはすべて現在得られている数字を使用しています。そして、その数字を機械的に当てはめれば、タンチョウの現状はランク引き下げに該当する



でしょう。しかし、数字(=主に生息数)を指標として使うことは、判断手法として、簡単で明瞭に見えますが、その一方で危うさがあります。現場で調査活動を行い、その結果を数字で発信している私たちは、その危うさを実感しています。実際に野生動物の総数調査において、完全な数を把握することは困難であり、常に不確実な誤差を含んでしまいます。どこまで実数に近い数字であるかという判断は非常に難しく、何時も苦勞しています。そのため、生息数を報告するレポートには必ず、何時、誰が、どんな方法で、さらに天候など、どんな条件下で・・・と数を出した前提条件が記されていて、つまり、条件(日時、方法、など)が異なっていれば出てくる数字は変るはずであることを前提にしています。しかし、一旦数字が出てしまうと、数字の一人歩きが始まり、それが信頼できる絶対的判断基準であるかのような扱いを受けてしまうことがよくあります。野生動物の現状判断に、個体数に偏重した数字に頼るのは危険なのです。

さらに、タンチョウの場合は、使われている基準以外の要素で、問題が山積しています。北海道でタンチョウの生息数が増えてきたのは、餌を給餌や牛の飼料に依存してきたため、生息環境が回復してきたからではありません。生息の基盤として最も重要な食料を人間の経済活動に依存しているというのは、野生動物にとって極めて不安定な状態であると言えます。まして、北海道の酪農業は大規模な変換期を迎えていて、これまでのように牛とツルが仲良く(?) 餌を分け合っている状況では無くなってきています。近い将来、北海道でタンチョウの現在の生息数を維持していくためには、何らかの形で年間を通じた『給餌』を継続していかなければならないのではないかとさえ予想されるのです。

Red Listのカテゴリーの中に「野生絶滅」というランクがあります。北海道でのタンチョウの現状と将来を考える際に、この野生の意味について、或いは定義について改めて考えていく必要があるように思います。北海道では、人間の経済活動から年間を通じて完全に独立していると判断されるタンチョウは、ほんの数パーセントあるいはそれ以下でしょう。以前、RCCのエコキャンプに参加し、給餌場を見学した外国の学生から、「これは野生の鳥ですか？」という率直な感想が出ていたことを改めて思い返します。

BirdLife Internationalでは、Red Listのカテゴリー見直しに当たって、それぞれの種やグループの専門家・機関と協力するとしています。

今回はそれがギリギリの場面で働き、現場の意見が届いたことにはなりますが、カテゴリーの判断の際に数字に頼っている、あるいは数字に頼らざるを得ない現状が改善されたわけではありません。現在のIUCN Red Listの枠組みは、IUCNに種の保存委員会(SSC:Species Survival Commission)が参加し、SSCが組織するネットワークの中にツル専門家グループ(CSG:Crane Specialist Group)が入っています。日本からはIRCN代表の百瀬ゆりあとRCCの百瀬邦和とがCSGの運営委員会(Steering Committee)の委員になっています。

今回は、前回のカテゴリー見直しの際に培った経験と個人的繋がりも活用して「現場の判断」を反映させることができたのですが、本来は、現地での生態や存続に対する危機要因など、数字に表せない情報をRed Listの管理に反映させる仕組みが機能するようにしなければなりません。

現在ツル類では、SSG→CSG→IRCN(→RCC)といった現場までのネットワークがあり、それが実際に機能しているのですから、Red List管理担当部署がそれを活用して欲しいこと、そして現場で活動している私たちも、現状についての情報発信に、より一層努めなければならないことを改めて認識したところです。



## 日本のラムサールに住んで

田村佑輔 (NHK釧路局)

「正月休みは北に旅行に行って、大自然のなかで過ごそう！」学生時代に何度も友人から誘ってもらった。ただ北と言っても北海道ではなく、イランの北部のことだ。7年ほど前、イランに留学をしていた。釧路とつながりの深いラムサール湿原のある国といえば、皆様もよくご存じだろう。

イランでは長期休暇になると多くの国民がラムサールやその周辺(カスピ海沿岸地域でペルシア語では“ショマル”=北)に旅行に出かける。そこに別荘を構えて、あるいは借りて、



家族と過ごす休暇は全イラン国民の理想の休日とも言える。いわゆる開発されたリゾートを楽しむというよりは、大自然のなかで過ごすのがメインだが、国土の大部分が乾燥した気候のイラン人にとって何よりの幸せらしい。私もラムサールを含めていくつか北部の町でバーベキューや、釧路湿原のようにカヌー体験をしたり、楽しい思い出ばかり残っている。

昨年の8月に釧路に来てからそろそろ1年。釧路湿原を通るたび、全イラン国民が憧れた“北”に住んでいることを実感する。加えてタンチョウなど貴重な鳥類も見られるという観光地としてなんともぜいたくなエリアだ。イランの“北”が最高の観光地だと思っている現地の知人たちに「日本にもラムサールのような場所がある」と言ったら、どんな反応をするだろうか。

ことは新型コロナの影響で例年より観光客が少ない状態が続いているが、8月からは釧路―成田便が新規就航するなど良いニュースもある。国内外の多くの人が“日本のラムサール”を楽しむ日が早く戻ることを願っている。



## <連載> 鳥と自然と人⑦ フクロウとリンゴ園

石 弘之（本会顧問）

カリフォルニア州のソノマで果樹園を営んでいる友人がいる。もとは、シリコンバレーのバリバリの技術者だったが、早めに引退して念願のオリーブや果樹の農家に転業した。私は、フクロウのフリークであり、わが家には各国で集めたフクロウの置物が1000以上ある。その趣味を知っている友人が、「本物のフクロウを2羽レンタルした」と自慢げにメールを送ってきた。

アメリカでは、果樹園のネズミ退治のために、メンフクロウのリースが盛んだ。放しておく、勝手に捕ってくれるが、昼間は姿がみえず活躍は夜間にかぎられるので、その働きぶりはもうひとつ目に見えない。宣伝では、1日で最大12匹のネズミを捕まえるという。ただ、果樹園には殺鼠剤がまかれることも多く、フクロウが死んだネズミを食べて中毒しないように近隣の農家とも協力が必要という。

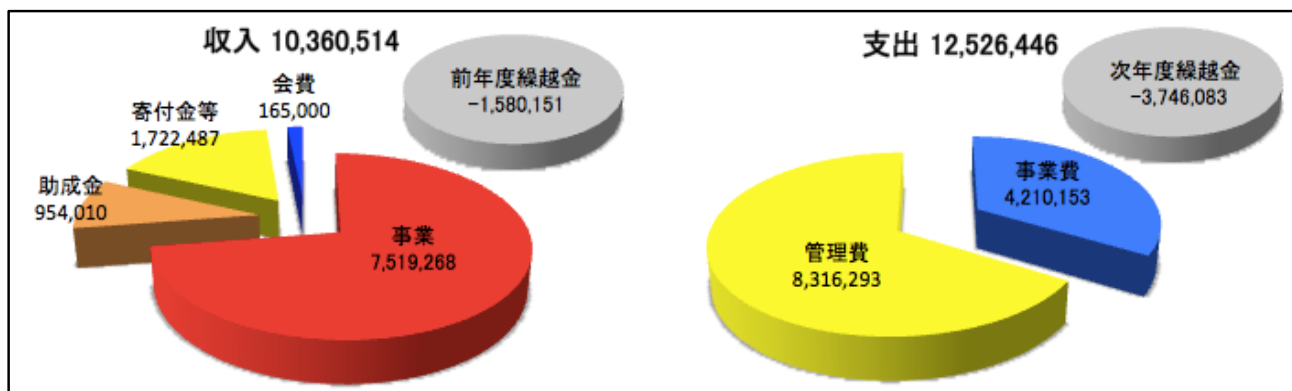
フクロウの活躍は、日本にもあった。リンゴの代表的な産地青森県津軽のリンゴ園では、樹皮や根をかじるハタネズミの被害が多く、その駆除にフクロウがひと役買っている。弘前市の農家約30人でつくる「下湯口ふくろうの会」は、弘前大の協力を得て6年前から園内にフクロウの巣箱を設置している。

以前は園内にフクロウが住んでいたが、フクロウが巣をつくる大木のウロは、摘果しやすいように小ぶりの木が増えたためになくなってフクロウは減った。弘前大の調査では、フクロウは巣箱に営巣して順調にヒナが巣立ち、4～5月には、リンゴ園周辺のハタネズミは3割ほど減ったという。

## <活動記録> (2020年4月～7月)

- 4月22日 標茶町阿歴内に傷病鳥の件で環境省に同行
- 4月23日 根室振興局農地課と草地更新事業の件で打ち合わせ
- 4月30日～5月2日 飛行調査と補足の地上調査
- 5月22日 運営会議(6名参加)
- 5月30日 理事会開催
- 5月31日 総会開催、臨時理事会開催
- 6月1日 中標津 俵橋湿原でデントコーン畑種まき(7名参加)
- 6月20日 標識調査勉強会を開催(わっと)
- 6月25日 「(仮称)苫東厚真風力発電事業計画段階配慮書」に関する意見書を提出
- 6月27日～7月18日 標識調査実施

### 2019年 タンチョウ保護研究グループ 事業支出入



## < 会 員 > ( 7 月 27 日 現 在 )

会員数：179名（運営会員：26名、個人サポート会員：153名（卵117、ひな33、若鳥2、成鳥 0、終身 1））

Red-crowned Crane Conservancy (RCC) newsletter

# TANCHO

Fortieth issue July 2020

### <表紙写真>

撮影： 十勝北部で確認された  
タンチョウの親子  
撮影者： 竹中 健

認定特定非営利活動法人  
タンチョウ保護研究グループ

〒 085-0036

北海道釧路市若竹町9番21号

Tel/Fax 0154-22-1993

e-mail: [tancho1213@pop6.marimo.or.jp](mailto:tancho1213@pop6.marimo.or.jp)

URL: <http://www6.marimo.or.jp/tancho1213>